

京都大学	博士（文学）	氏名	小野（柿本）真代
論文題目	近代日本における子ども向け雑誌と読書文化		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>明治期に刊行がはじまった日本の子ども向け雑誌は、創刊・廃刊を繰り返しながら様々に展開し、戦前期には60種以上の子ども向け雑誌が存在した。その豊富さは占領下の日本に視察に来た米国の出版関係者を驚かせるほどであったといわれる。こうした子どもの雑誌文化は、日本においていかに形作られ、またそれらはどのように子どもという読者を作り上げてきたのだろうか。本論文は、近代日本における子ども向け雑誌が成立する過程と子どもの読書文化を歴史的な視座から問い直そうとするものである。</p> <p>近代日本における子ども向け雑誌についての研究は、主に児童文学の領域でなされてきたが、代表的な研究としては続橋達雄『児童文学の誕生：明治の幼少年雑誌を中心に』（1972年）があげられる。ここでは「明治の児童文学は、幼少年雑誌に文芸欄が設けられたことで誕生の機を迎え」という立場をとり、1888年の『少年園』の誕生から1895年創刊の『少年世界』以前までを〈創始期〉と位置づけ、明治期の教育制度と関連付けながら『少年園』をはじめとした「幼少年雑誌」誕生の背景を描いている。</p> <p>1980年代には、フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生』の翻訳出版や柄谷行人「児童の発見」などが発表されたとともに、『穎才新誌』や『少年園』など代表的な子ども向け雑誌の復刻版も出版されはじめ、子ども向けの雑誌は「少年」や「少女」といったカテゴリーの生成や当時の少年たちの遊学、上昇志向を知るための好適資料として様々な研究領域で扱われるようになった。</p> <p>石井研堂が「少年園出で、少年雑誌界に新味の典型を示し、ここに進歩の一線を画せり」と評したように、『少年園』以前の雑誌は『穎才新誌』（1877年創刊）のような子どもの作文を掲載することを主眼としたものがほとんどであった。これに対し、『少年園』は、今日われわれが想像する子ども向け雑誌の原型、すなわち大人が子どものために編んだ読み物に豊富な挿絵、クイズに投書など、様々な記事を併せ持った子どものための雑誌の形式を初めて提示したものであった。</p> <p>こうした「新味の典型」を『小国民』や『少年世界』など、後の数多くの子ども向け雑誌が踏襲したことや、全国的に多くの読者を獲得したことだけでなく、「学校や家庭のもとにある依存的な存在」、すなわち「〈教育〉の客体」としての「少年」をはじめ形作ったのが『少年園』であったとの指摘もある。以上のような『少年園』の歴史的意義についてはこれまでの研究が繰り返し指摘していることでもあり、本論</p>			

文でも『少年園』の登場までを一区切りとする立場を継承する。

しかし、『少年園』以前に子どもを読者対象とした雑誌がなかったかといえば、そうではない。例えば、大阪で創刊された『ちよのあけぼの』（1886創刊）は、作文の投稿を主とせず、大人が「子ども」のために編集した読み物を中心とした雑誌であった。ところが、『穎才新誌』という例外を除けば、『少年園』以前の子ども向け雑誌の研究は児童文学研究の領域においてほとんど等閑に付されてきた。

鳥越信はこれまでの児童文学研究の中で、「草創期」、すなわち1891年の巖谷小波『こがね丸』以前に関する研究が不十分であったことを指摘した上で、『はじめて学ぶ日本児童文学史』（2001年）の編集にあたっては「草創期」のキリスト教児童文学、子どものための科学・知識読み物、海外作品の翻訳についての論考を意識的に取り込んだと述べている。しかしながら、「草創期」の雑誌については書誌情報の提供にとどまっており、結果として『穎才新誌』のような作文投稿雑誌から『少年園』のような総合的な内容をもった雑誌への移行の過程やその要因については、「教育界からの要請」以上の言葉では説明されないまま今日に至っている。

なぜこのような研究状況なのか。その要因の一端は、例えば1876年創刊のキリスト教児童雑誌『よろこばしきおとづれ』の後継誌である『喜の音』に対して、「内容は、欧米—それも主としてアメリカの同種雑誌の記事の翻訳で、聖書の一節を啓蒙的に書いた読物や宣教師の伝道エピソードなどであって、児童文学的な創造力の垣間見えるものはひとつもなかった」との評価からもうかがえる。ここから読み取れるのは、「児童文学的な創造力」の重視と、「翻訳」や「啓蒙」への関心の希薄さである。

大澤聡は雑誌研究には決まった方法論が存在せず、個々の研究者の関心や研究領域に依存しがちであることを課題とし、雑誌分析の一大拠点としての文学研究の成果を認めつつも、「小説」や「作家」に着目するあまり、雑誌というメディアの特性である「猥雑性・総合性」を検討できなかったことを「文学中心主義」の陥穽と指摘した。この大澤の指摘は子ども向け雑誌の研究においてもあてはまる。続橋の研究も児童文学が生成する土壌としての雑誌に注目したものであったように、これまでの子ども向け雑誌の研究は、文芸作品に対する関心、とりわけ文芸作品の「芸術性」や「教育性」、「子どもに対するおもしろさ」といった観点から評価されてきた。したがって創造性や芸術性の乏しい「翻訳」調の記事や「啓蒙」的な記事を中心とした草創期の子ども向け雑誌は本格的な研究対象とはならなかったのである。ところが、子ども向け雑誌の成立を考えると、「翻訳」は極めて重要な意味をもつ。先行研究においては『少年園』などの雑誌の誕生の要因を「教育界からの要請」としてきたが、日本の場合は近代的な教育制度もまたこうした西洋からの輸入、すなわち「翻訳」を経て成立したものであったからである。

明治政府、とりわけ文部省は近代的な国民教育を普及させることを緊急の課題とし

たが、当時それはアメリカの教育に倣うことであったと橋本美保は指摘する。そのための情報の獲得および制度の確立は日米間の人的交流のみならず、アメリカからの様々な書籍・雑誌の輸入・翻訳をもまた大きな影響力をもったという。この指摘を踏まえると、教育制度のみならず、それと密接な関係にあったとされる草創期の子ども向け雑誌についてもまた、西洋との人的交流や書籍・雑誌の輸入による影響は見過ごすことができない。

そもそも、これまで子ども向け雑誌はその研究手法に関わらず、どのような論説・小説が載せられているか、どのような投稿があったか、またそれはどのような子ども観やイデオロギーに裏打ちされたものであったかといった、「誌面に書かれた内容」に対しては様々な角度から検討されてきた。それに対し、どのように作られたか、特にどのように資金や資料を調達し、どのように読者を獲得したかなど、必ずしも誌面に反映されない事柄についてはあまり注意を払ってこなかった。

近代の雑誌とその読者の関係について数多くの成果を残している永嶺重敏は、これまでの活字メディアに関する研究が、多くの場合メディアと読者を「無媒介的に直結させてとらえる二極構造的なアプローチ」によってきたことを批判的に論じ、人々の読書生活を成り立たせる構成要素として、「第一に雑誌等の活字メディアの発達、第二にその普及装置としての多様な流通機構、第三に読者の側のメディア受容能力という三点」を挙げている。

『〈読書国民〉の誕生：明治30年代の活字メディアと読書文化』（2004年）で永嶺は、活字メディアと読者をつなぐ制度や場所、例えば郵便制度や鉄道網、図書館や縦覧所の問題を検討することで、明治30年代において「新聞や雑誌や小説等の活字メディアを日常的に読む習慣を身につけた国民」、すなわち〈読書国民〉が誕生する過程を立体的に描き出した。こうした書物と読者の「あいだ」を考察することの重要性については、和田敦彦も繰り返し指摘してきた。これまで歴史学や文学研究、心理学、社会学など様々な領域で多様かつ個別に展開されてきた読書に関する研究について、それぞれの関連性と意義をまとめた『読者の歴史を問う：書物と読者の近代』（2014年）では、「読書」を「書物が読者へとたどりつき、理解されていく一連の流れ」ととらえた上で、「読者」の歴史を問うためには書物と読者をつなぐ存在、例えば流通機構や読書の間、仲介者など〈あいだ〉の部分にも注意を払いながら、そうした流れを細分化して考察していくことが不可欠であると指摘する。ここでは、その流れを大きくふたつに分け、書物が読者に「たどりつくプロセス」と、届いた書物を読者が享受する「理解するプロセス」とに分けて考察している。

本論文ではこうした読書研究の成果に学び、子ども向け雑誌の成立過程と子どもの読書文化について、雑誌が「つくられる」過程、読者へ「届けられる」過程、読者に「理解される」過程の3つの観点から論じた。これらの観点から雑誌をとらえなおすとき、「翻訳」は創造性に欠く二次的な行為ではなく、国境を越えて書物をもたらした

新たな読者と読書文化を形成する創造的な行為である。

具体的には、「つくられる」過程では雑誌の編集者らがどのように雑誌を創刊することが可能であったのか、資金の調達方法や参照した雑誌をどのように入手し、また何をどのように翻訳していたのかを分析した。「届けられる」過程では、その雑誌をどのような方法で読者のもとへ届けようとしたか、流通の方法や仲介者の存在にも目配りしながら検討した。さらに、「理解される」過程では、まず前提となる子どもにとっての「読書」がどのようなものとして規定されていたかを読書図から分析し、そのうえで読者が雑誌をどのように読んでいたのか、雑誌に掲載された投書ではなく雑誌本体に残された書き入れや日記を通して分析した。分析の対象については、1876年創刊のキリスト教機関誌『よろこばしきおとづれ』からその後の子ども向け雑誌の典型となった1888年創刊の『少年園』までを中心に行った。

以下、各章で明らかになったことを整理・要約する。

第1章では、キリスト教伝道によって日本にもたらされた子どもの読み物について、まず幕末期に来日した宣教師らの伝道と出版活動について、子どもを対象としたトラクト類を確認したのち、雑誌『よろこばしきおとづれ』を中心に分析を行った。

近代日本におけるキリスト教伝道は、1858年日米修好通商条約の翌年から本格的に開始されたが、キリシタン禁制の高札が撤去されるまでは目立った伝道は難しかったため、宣教師らは日本語を学びつつ、中国伝道で用いられた漢訳聖書やトラクトを活用した。

1872年の「学制」発布に続き、1873年にキリシタン禁制の高札が撤去されたことによって、西洋文化の窓口としてキリスト教に関心をもつ人々も増加し、本格的に伝道が開始されることになり、日本語の伝道用トラクトも出版されはじめた。その中のひとつである『真の道を知るの近路』は、子どもや漢字が読めない人々も対象としたもので、江戸時代にはなかった新しい子どもの読み物のさきがけとなった。

次に、1876年に創刊された『よろこばしきおとづれ』に着目し、この雑誌がどのように資金や素材を得て編集されていたのか、またどのように読者へ届けられたのかについて分析した。『よろこばしきおとづれ』は、聖書の話、宣教師の逸話や讃美歌などを挿絵入りで掲載した8～12頁建ての雑誌で、「わが国で初めての児童文学の雑誌」とされる。編集にあたったのは、米国婦人一致外国伝道協会派遣の宣教師 S. B. マクニールで、彼女が教師をしていた共立女学校の一室で編集作業が行われ、印刷はネイサン・ブラウンのミッション・プレスで行われた。記事はすべてマクニールが書いたわけではなく、オランダ改革派の宣教師 S. R. ブラウンやアメルマン、ヘボンらの聖書翻訳を助けた高橋五郎や奥野昌綱など、横浜や築地で活動していた宣教師や日本人キリスト教徒が寄稿していた。また日本人助手として、植村正久や井深梶之助ら、ブラウン塾の出身者がマクニールを助けた。初代日本人助手だったという植村正

久によると、『よろこばしきおとづれ』の編集に際しては、『小孩月報』という上海で発行されていた子ども向けのキリスト教雑誌が参照されたという。

『小孩月報』と『よろこばしきおとづれ』を比較すると、内容や構図が共通する記事が多数含まれており、ともに外国日曜学校協会という組織から資金提供を受けていたことが明らかになった。アメリカでは大規模な第二次信仰復興のもと日曜学校運動が展開され、西部の開拓地で日曜学校を設立するとともに、日曜学校で教材として用いるためのカードや子ども向けの読み物が多数出版されることになった。こうした運動は、やがて国境を越え、ブルックリンで外国日曜学校協会が設立されることとなった。外国日曜学校協会では資金だけでなく、アメリカで出版された日曜学校用の読み物や雑誌の提供も行っていった。

中国で発行された『小孩月報』の場合は、すでに発行されたトラクトやキリスト教新聞・雑誌があったため、外国日曜学校協会から送られたアメリカの新聞・雑誌だけでなく、中国で発行されたキリスト教新聞・雑誌を参照しながら編集していた。一方、日本の場合は伝道が本格的に開始されてからは日が浅く、神戸で1875年に創刊された『七一雑報』しか先行するキリスト教新聞がなかった。そのため、『よろこばしきおとづれ』の記事は、『小孩月報』や米国聖教書類会社から発行された雑誌や子ども向けの読み物からの記事の転載が多く、編集にあたっては原文よりも聖句や信仰の重要性をさらに強調する記事になるよう書き直しが行われていた。例えば、アメリカの難船救助についての記事では、難船救助の方法などを説明するだけでなく、「耶蘇教の会堂講義所および日曜学校は浪風あらしき浮世の海に漂白する人々の靈魂を救ふ場所」と、教会や日曜学校の役割についても『よろこばしきおとづれ』では説かれていた。こうした加筆がなされたのは、アメリカや中国に比べ、キリスト教雑誌や日曜学校用教材が少なかった当時の日本では、『よろこばしきおとづれ』は子どものための雑誌であるだけでなく、日曜学校の教材として、また人々を信仰に導くためのトラクトとしての役割も期待されていたためだと考えられる。

『よろこばしきおとづれ』は、宣教師らの開拓伝道の際に持参され、伝道地の人々に配布された。女性や子どものための読み物が少なかった当時、『よろこばしきおとづれ』を無料で配ることは、集客に役立った。伝道の際に無料で配布される以外に、教会やミッション・スクールでも購読され、書店での販売というよりは、直接の配布や定期購読によって読者へ届けられる雑誌であった。『よろこばしきおとづれ』はのちに『喜の音』と改題されるが、40年以上発行が続けられた。『小光子』や『日曜学校』など、後続の子ども向けキリスト教雑誌の基礎を築いただけでなく、直接伝道を目的としない子ども向け雑誌にも影響を与えていた。このことは、第3章で詳しく検討する。

第2章と第3章では、1886年11月、大阪で創刊された『ちゑのあけぼの』に

ついて扱った。『ちゑのあけぼの』は1部5厘、四六倍判の4頁建ての雑誌であり、各頁に二代目長谷川貞信ら浮世絵師による豪華な挿絵が付されていたのが特徴であった。内容は歴史偉人伝、理科読み物、科学読み物、英単語などであり、子どもたちの投書ではなく大人が編集した読み物を中心とした雑誌であった。子どもの投書ではなく、読み物を中心とした子ども向け雑誌は、1888年11月創刊の『少年園』以降一般的になっていったことを考えれば、『ちゑのあけぼの』を創刊した人々は、卓見を持った人物たちといっても差し支えないだろう。しかし、『ちゑのあけぼの』の編集者らについては、無名の人物が多いため、第2章では編集人や関係した絵師について扱った。

まず雑誌の発行所や誌面、編集者の変遷を踏まえた上で、編集者たちの経歴を教会史料や学籍簿、新聞報道によって跡付け、彼らが子どもの雑誌を編集するにいたるまでの経緯について、真鍋定造を中心に考察した。編集に関わった人物は、みな大阪教会や神戸教会で受洗しており、特にアメリカン・ボードの宣教師らとの関わりが深かった。

二代目の編集人となった真鍋定造は、愛媛県今治で商売をしていたが、アメリカン・ボード宣教師アッキンソンの四国伝道によってキリスト教信仰に目覚めたのち、京都へ赴き同志社英学校に入学した。同志社英学校の卒業生のひとりであった伊勢時雄に牧師就任を依頼するなど、今治教会の設立メンバーとして活躍するが、関西のミッション・スクールへの入学希望者を四国から引率する際に海難事故にあい、肺病を患って同志社英学校を中退することになった。中退後は愛媛で療養し、回復してからは精力的に伝道を行い、笠岡教会の仮牧師となる。その後、神学を学ぶため再び同志社英学校の1年間のコースへ編入したが、病状は悪化し仮牧師への復帰や伝道に従事することが難しい状態になった。そこで真鍋は、直接の伝道ではなく出版活動を通して福音を伝えることを目指した。宣教師ラーネッドとともに聖句辞典である『聖書語類』を編纂したほか、子どもの教育にも目を向け、幼少期から西洋文化に親しむことができるよう唱歌集の出版や『ちゑのあけぼの』の編集に従事した。真鍋は唱歌集や雑誌を通して、西洋文化やその重要性を多くの子どもたちに伝えた。彼にとって、幼少期から西洋文化の感化を受けることは将来的にキリスト教を信仰する為の土台となるものだった。その意味で、真鍋は晩年まで啓蒙家であり、伝道師であった。彼の信仰の深さと伝道への熱意は、多くの人々を信仰へ導いた。そしてそれは、児童文化の領域に新たな光を当てるものでもあった。

第3章では『ちゑのあけぼの』がどのようにつくられたのか、またどのように読者へ届けられたかについて、キリスト教との関係に注目しながら分析を行った。第2章でみてきたように、編集者らはみなキリスト教徒であったにも関わらず、創刊にあたっては小学校教育を補完するためのものとして位置付けられており、一見するとキリ

スト教との関係はなさそうに見える。しかし、第1章で分析した『よろこばしきおとづれ』やその後継誌『喜の音』、それから日本で最初のキリスト教週刊新聞『七一雑報』などから、多くの記事を引用していることが明らかになった。また、売捌所の一覧をみてもキリスト教の人的ネットワークが活かされていることがわかる。江戸期以来の心齋橋を中心とした絵草紙屋に加え、キリスト教関係書店が多く名を連ねている。例えば、第2章でみてきた真鍋の兄が今治で営んでいた書店や、笠岡時代に寄宿していた江浪家の書店、それから堺教会の伊藤猛の名前もある。つまり、『ちゑのあけぼの』が読者に「とどけられる」過程においても、キリスト教ネットワークが基盤になっていたのである。『ちゑのあけぼの』がキリスト教主義を前面に押し出した雑誌ではなかったものの、伝道でつちかわれた人的なネットワークは、販路の拡張に役立った。

一方で、誌面の編集にあたっては『七一雑報』や『喜の音』の記事を引用しつつも、例えば「上帝」や「神」などの語句は「造物主」と置き換えたり、聖書の一節を削除したりとキリスト教に関する内容は慎重に隠されていた。聖書の教えを、ことわざなどに置き換えることによって、『ちゑのあけぼの』では一般的な教訓譚へ作り替えていた。ただし、『ちゑのあけぼの』はキリスト教を否定しようとするものではなく、聖句を用いずにキリスト教の教えや西洋文化を伝えようとしたものだと考えられる。例えば「白く塗りたる墓」という論説は、一見すると子どもたちに対し偽善を戒める文となっているが、これはパリサイ人の偽善と腐敗を批判したキリストの言葉でマタイ伝が出典である。日曜学校に通うような、もともとキリスト教に関心のある子どもたちだけでなく、学齢期の多くの子どもにも聖書の教えや西洋文化を伝えるために、このような編集がなされていたと推測される。

『よろこばしきおとづれ』は様々な宣教師や日本人伝道師が新たに開拓された伝道地で配布することで、人々を惹きつける手段として活用されていた。一方、『ちゑのあけぼの』はすでに伝道が行われ、教会が設置された地を売捌所として設定し、キリスト教を前面に押し出さないようにすることで、新たな読者の獲得を目指したものといえるだろう。キリスト教ネットワークによって、頒布ルートの確立と素材となる雑誌の確保ができたことが、1886年という早い時期に、読み物を主体とした子ども向け雑誌を創刊しえた要因であった。

第4章では、宣教師らがどのように本国の書籍類を入手していたかについて、幹事に宛てられた書簡から考察を行った。アメリカン・ボード派遣宣教師の場合、必要な物品や書籍があると、まず日本担当の幹事で神戸在住のD. C. ジェンクスに依頼をした。ジェンクスは宣教師の給与なども管理していたため、そこから物品の購入費が差し引かれたのである。宣教師の書簡には、ジャガイモやカーペット、ストーブなど日常生活に必要なものの購入を依頼するものが散見されるが、ここでは書籍購入のプロ

セスに注目した。

ジェンクスは本国へ依頼を出す場合も多かったようだが、書籍によっては日本の洋書取次店である丸善へ依頼していたことが明らかになった。本章では、丸善からジェンクスに宛てられた英文書簡4通、和文書簡1通を翻刻し、本国の書籍を入手するルートのひとつとして、丸善との取引の様子を分析した。ジェンクスが丸善へ宛てた書簡は所在不明のため、詳細がわからない部分もあるが、丸善へ取引を依頼したのは洋書だけでなく、洋品や洋紙、また丸善が著作権を獲得したヘボンの『和英語林集成』などであった。恐らく、丸善を利用した方が経費削減につながる場合は本国に直接ではなく丸善に依頼していたものと思われるが、どうやらジェンクス側は丸善のいう「前金制」というシステムが理解しきれておらず、取引開始当初はあまりスムーズな取引はできていなかったようである。丸善側もまだ多くはなかった地方との取引かつ外国人との取引に対し、送料や箱代を含めた前金を事前に送ってもらえるよう、繰り返し慎重に書簡での説明を行っていた。また、『和英語林集成』は35部と大量に注文しており、なおかつ特別版の用意を丸善に依頼していた。辞書を多く購入したのは、宣教師らの日本語学習に役立てるためだと考えられる。3章までで、宣教師らがもたらしたアメリカの子ども向け読み物が、『よろこばしきおとづれ』や『ちゑのあけぼの』の創刊に影響を与えたことをみてきたが、本国の書籍や雑誌を宣教師らが入手しようとする際のルートは、本国との単線的なやりとりのみではなく、場合によっては日本の洋書取次店を介したルートも存在したことが明らかになった。

これまではキリスト教の人的・物的ネットワークを利用して創刊された子ども向け雑誌についてみてきたが、キリスト教ネットワークを介さない雑誌はどのように成立し得たのか、『少年園』を対象として第5章で検討した。

『少年園』は1888年11月3日に創刊された雑誌であり、「雑誌国民之友出で、政論雑誌界に、清新の空気を吹込みたると同じく、少年園出で、少年雑誌界に新味の典型を示し、ここに進歩の一線を画せり」と石井研堂が述べたように、すでに「少年雑誌の嚆矢」としての評価が定まっている。『少年園』の読者であった詩人の河井醉茗は、「その頃教育、政治、文学等に関する好い雑誌がそろ／＼出かけてみたけれど、われ／＼少年のためにといふので非常な悦びを感じ、良いもわるいもなく『少年園』にくひついた…何処となく雑誌全体に西洋味の交つてみたのも目新しく感じられた」と後年回想しているが、この「西洋味」は何に起因するのか。従来『少年園』はイギリスの児童雑誌『リトル・フォークス *Little Folks*』に倣ったという指摘がなされてきたが、本章ではアメリカの子ども向け雑誌である『セント・ニコラス *St. Nicholas*』との関係について考察した。

『セント・ニコラス』は1873年11月アメリカで創刊された児童雑誌であり、宗教色や説教臭さを排し、サンタクロースのように毎月子どもたちに楽しみを届ける



ことを目的としたこの雑誌は、世界で最もすぐれた児童雑誌ともいわれる。本章で『セント・ニコラス』に注目したのは、『セント・ニコラス』に『少年園』主幹であった山縣悌三郎の長男、山縣文夫からの投稿文が掲載されており、その掲載文によると文夫は『セント・ニコラス』の編集部へ『少年園』を送っていたためである。

本章ではまず、当時の日本で『セント・ニコラス』が当時の日本でどの程度購読されていたのかについて、『セント・ニコラス』の投書欄などから考察した。神戸英和女学校や明治女学校などのミッション・スクールで購読されていただけでなく、アメリカン・ボードのある宣教師は『セント・ニコラス』に日本の文化や自然について報告する役割を担っていたことが明らかになった。また、何らかの事情で日本に住んでいるアメリカの子どもたちが、本国の親戚から送ってもらったり、定期購読をしたりという事例がみられたものの、日本人が購入しているという内容の投書は、山縣文夫のもの以外には見受けられなかった。文夫は1888年ごろから『セント・ニコラス』を読んでいると報告しており、山縣家では『セント・ニコラス』を定期購読していた可能性が高い。

山縣悌三郎は東京師範学校に在籍したころから、東京書籍館や教育博物館で『サイエンティフィック・アメリカン *Scientific American*』などの洋雑誌を閲覧し、その中の記事を訳して雑誌に投稿することを繰り返していた。文部省御用掛に任命されてからも「常に欧米より新著の図書雑誌を読むに忙はしく、又頻りに教育時論、教育報知等の教育雑誌に寄稿した」といい、洋書や洋雑誌から知識を吸収し、それを翻訳するという活動が、彼の文筆活動において重要な作業であった。前章までみてきたのは、キリスト教ネットワークを介した洋書の受容であったが、山縣の場合は文部省による洋書の収集が、自らの思想形成や教科書・雑誌編集に重要な役割を担ったといえる。

『セント・ニコラス』に投稿した文夫の手紙は、のちの大正天皇である明宮嘉仁親王に関する『セント・ニコラス』の記事に対して異議申し立てをするものだった。

『セント・ニコラス』に掲載された明宮嘉仁親王の肖像は美しく描かれておらず、またアメリカ人の少年といさかいになったというエピソードは聞いたことがない、代わりに美しい肖像とともに明宮嘉仁親王の人柄についての記事も掲載されている『少年園』を送る、と文夫は結んだが、文夫が送った号の『少年園』には、『セント・ニコラス』から訳された記事が掲載されていた。この号だけでなく、『少年園』では偉人伝や科学記事、挿絵など様々な記事を『セント・ニコラス』から転載・翻訳していた。

ところが、冒険譚を描く際にも冒険の楽しさよりも恐怖を強調し、危険性を排除しようとしたとされる『セント・ニコラス』とは、同じ話でも描かれ方はまったく異なるものであった。例えば、水雷について、『セント・ニコラス』の記事ではあくまで防衛のための武器であり、他国とのトラブルは話し合いで解決すべきと主張するのに対し、『少年園』では水雷の爆発する様子は実に壮観で、子どもたちには「国家感

情」を養うため軍事演習を見に行くことが推奨された。第2章で検討した『ちよのあけぼの』もまた、『ハーパーズ・ヤング・ピープル *Harper's Young People*』などのアメリカの子ども向け雑誌の記事を翻訳・掲載することがあった。しかし、『ちよのあけぼの』では日本と西洋が対比されながら見習うべき手本として極めて好意的に「西洋」を参照したのとは対照的に、『少年園』では西洋の知識や文化の紹介をしながらも、西洋に対する羨望というよりも、ときに敵対意識をもちつつ、大幅に加筆修正がなされていた。すなわち、『少年園』は『セント・ニコラス』からコンセプトや編集方針を学ぶために参照したというよりも、西洋の雑誌に掲載されている伝記や科学記事に着目し、将来日本の礎となる子どもたちに西洋文化や新たな知識を提供するとともに、子どもたちに世界へ目を向けさせ、「国民」としての意識を引き出すことにもつながっていたのであった。

第5章までは草創期の子ども向け雑誌が「つくられる」過程と読者へ「届けられる」過程を中心に考察してきたが、第6章以降は、まず読書という行為自体の考え方の変容をおさえた後に、読者が活字メディアをどのように読み、またどのように書き・書かされてきたのかという「理解する」過程に焦点を当て、子どもの読書文化を複合的に明らかにすることを目指した。

第6章では、二宮金次郎の「負薪読書」イメージについて論じた。二宮金次郎は、近代日本を代表する模範的人物のひとりであるが、数多くの偉人の中でも薪を背負いながら本を読む、「読書」のイメージが特に色濃い人物である。二宮金次郎の表象に注目し、なぜ二宮金次郎が柴や薪を背負いながら読書する人物として描かれたのか、またいつからその姿として描かれ、定着したのかその過程をたどることで、「読書」観の変遷を追った。

二宮金次郎は死後に書かれた伝記『報徳記』の出版後、1890年代以降教科書や子ども向け読み物に登場するようになり、1900年代初頭までには子どもたちが見習うべき模範的人物として定着していたものとみられる。『報徳記』には挿絵がなかったものの、そこで示された金次郎のエピソードは、寺子屋教科書として用いられた『童子教』『実語教』や幕府による庶民教化政策の一環として、「善行」により褒美を受けた人々の記録をまとめた『孝義録』の内容と重なるものであった。さらに、『実語教』のなかには、匿名の模範的人物が薪を背負いながら読書する姿がすでに描かれており、明治以降も教科書や雑誌の中で、子どもを背負いながら読書する少女や、牛をひきながら読書する少年の姿が理想的な子どもとして描かれてきた。つまり、二宮金次郎が薪を背負いながら読書して歩く姿として定着したのは、この図像が新たに作り上げられたというよりはむしろ、模範的な子どもを示す典型となっていた図像を、二宮金次郎に適用することによって、生みだされたと考えられる。

しかし、「読書」の位置づけは時代と共に変化した。薪を背負って読書する人物を

描いた『実語教』では、読書について「男女ともに読まずんばあるべからず」と一定の価値は認められながらも、「家業を打ち捨て、書を読めとにはあらず」と、中心となるのは家業であり、読書はあくまで家業の暇に行うものとされた。しかし、明治期に入ってから、子守や薪拾いをしながらも同時に怠らず読書することが推奨された。それは個人の立身出世の手段として、同時に富国につながるものとして「読書」が重視されたからであった。薪を背負いながら読書して歩く二宮金次郎の姿は、エリートコースにのることができず進学できなかった人々にとっても、独学することで富が得られる、成功できるという希望を見出すことができるものであった。

第7章では改めて『少年園』の読者とその実態について検討した。これまで、例えば『穎才新誌』の作文などの読者投稿からジェンダー規範の生成を明らかにした研究や、『少年世界』における投稿文の文体の変容に着目し、少年概念の内実の一端を明らかにした研究など、投稿欄を用いた優れた研究が多様に展開されてきた。しかし、実際の読者がこのような雑誌をどう読み、何を考えたかということについて投書を扱う際には注意が必要である。こうした雑誌に掲載された投稿文は編集側の理想像に同調するようなものが中心に選ばれた可能性もあれば、時に編集者による修正を加えた上で掲載される場合もあった。また、多くの読者の中で、雑誌に投稿してくるのは限られた能動的な読者に限られるため、雑誌の投稿欄はあくまで雑誌の表現の一部として捉えることの重要性が指摘されている。中川裕美がいうように、「読者投稿欄から読み解ける「読者像」は、研究者が望むような「フラットな読者像」ではあり得ず、読者投稿欄からのみの読者像の把握は極めて難しい」のである。

したがって、それぞれの読者の読書実践のあり方をより具体的に描き出すためには、雑誌に掲載された文章や挿絵から読み取れる情報のみではなく、読者や雑誌関係者の回想や日記など、別の資料を併せて参照することが不可欠である。

中川はこうした問題の克服のために、関係者からの直接聞き取りなどのフィールド調査や、「当時を知る者の手記、日記、回顧録、手紙、小説、インタビュー記事などの分析」などの資料を調査することを提案しているが、雑誌がどのように読まれたかを考察するための資料として、第7章では雑誌本体に残された書き入れを、第8章では少年の日記を用いる。

近年様々な雑誌が復刻され、また史料保護の観点などから原資料を閲覧する機会は限定されている。しかし、復刻版は複数の原資料から現存状態の良い誌面を選んで構成されるため、雑誌本体に残された読書の跡は、多くの場合そこでは捨象されることになる。現在、書籍や雑誌への書き込みをすることは、図書館等の蔵書に対してはもちろん禁止されており、また自身の所蔵するものを対象としたものであっても、価値を下げるものとして忌避される傾向にある。

しかし主に明治初期まで流通した和本では、校合や朱引き、注釈などの書き入れは

後の読者の理解を助けるものとして価値あるものと考えられた。こうした和本への書き入れから、その書物の理解の過程や当時の学習様態を明らかにする研究もなされている。また洋本についても、ルネサンス期を中心に、読者による書き入れが、初期の読者のテキストへの反応やテキストの向き合い方を解明する読書史の貴重な史料として位置づけられ、解釈などの書き入れのほか、下線を含む様々なマーキング部分の分析がすすめられている。第7章では、これらの研究の手法を参照し、『少年園』に残された書き入れを収集・分析した。

雑誌が同時代性の強いメディアであることを踏まえると、和本やルネサンス期の書物の書き入れに見出されるような次の時代の読者へ読み継ぐという意識は、これらの資料からは期待できない。しかし、明治期の雑誌の場合には、回し読みが行われたり、地域ごとの読書会が組織されたりしていたことを考えると、同時代の自分以外の読者を意識した書き入れを発掘しうることも想定できる。

雑誌に見出される書き入れの種類は多種多様であり、特に子ども向け雑誌は年少者が読んだものであるがゆえに、内容とはまったく関係のない落書きや手習いのようなものなども多く含まれる。一方で、数が多いとは言えないものの、署名や蔵書印などの持ち主の手がかりとなるようなものや、線引きや記号、誤字の修正、感想などの積極的な読書反応の記録も存在する。そして、これらの記録は個々の読者が雑誌にどう向き合い、どう読んだのかを編集というフィルターを介すことなくそのままの状態でも伝えるものとして貴重である。ただ、こうした書き入れを用いた研究にはすでに指摘があるように、偶然性に頼らざるを得ず、出所が限られるという点に弱点がある。こうした弱点を踏まえ、可能な限り体系的に調査を行うことを目的に、原資料が複数保存されている公的機関に所蔵される『少年園』のすべての冊子について調査を行った。

読者による書き入れは巻頭論説をはじめとした立身出世譚に比較的多くみられ、記事に同調し、自分を鼓舞するような書き入れが多くみられた。例えば、商業学校から大臣が出たという記事には「「豈堀越ノミナランヤ。我校ヨリ超進スル人ハ誰ナランヤ」との書き入れがなされ、イギリス人が雪中登山をしたという記事には「白哲人種ノ忍耐感ズルニ余リアリ神州男子タル者ハ宜シク此精神ヲ鼓舞スベシ」との書き入れがなされた。ほかには「此書須青年子弟可読者也読知趣味夫所得少乎」と、自分以外の他者、とくに年少者に向けて『少年園』の読書をすすめる書き入れもみられた。また記事によっては子どもに不適切と批判する書き入れも存在した。こうした書き入れからは、自分が深く理解するためだけではなく、読むべき記事を際立たせ、読むべきでない記事を排除する効果もまた生み出されていた。

当時流行した読書法として、読んだ本を忘れないため「全文の綱領たる部分、亦是記憶を要すべき必要と思意する箇所に、○印△印或は引線を」施したり、「先づ批評を加えたり線を引いたりして置きましたならば、それが幾らか抄録に代る」と、符号

をつけたり批評を加えることが推奨されていた。『少年園』に残された書き入れは、まさにこうした読書法にもとづいてなされていたのであり、『少年園』が書籍と同様、精読の対象であったことが明らかになった。

第8章では、明治期の子ども読者にとって、雑誌を読むことは生活のなかでどのような位置づけにあったのか、また彼らが読むことと書くことをどのようにむすびつけていたのかについて、10歳の少年の『日誌』をもとに分析した。

まず日記が学校教育において教材として定着していく過程について考察した。日記は毎日身近なことを書くものであることから、作文の訓練になるという価値がまず見出され、続いて家庭教育も学校教育を補完するよう行われるべきという論調の高まりを背景に、生徒の家庭での様子を学校が監視するためのツールとしての役割もまた見出されていった。一方、子ども向けの雑誌の中では、日記が自己の修養の手段としても扱われ、日記文の雑誌への投稿も増えたが、日清戦争の時期には従軍日記の出版や、戦争を記憶することの重要性も論じられるようになり、国家的観念を養成する手段としても日記が扱われることになった。日記には例文が用意されるだけでなく教員によって点検を受ける対象ともなり、自由な記述が許される場ではなく子どもとしてあるべき自分を書く場としても機能した。

日記の例文では、しばしば読んだ雑誌について書かれるが、本論文で扱った『日誌』でも『風俗画報』や『少年世界』といった雑誌を読んだ記録が残されており、さらにその読み方について教員からの指導が入っていた。また雑誌の投稿文を参照しながら自分の作文を作っていた様子も明らかになった。こうした例からは、家庭での読書にも学校の管理が及んでいたこと、雑誌を読むことは日常的な営みであると同時に、書くことの動機付けにもなっていた様子がうかがえた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、近代日本における児童雑誌の成立過程と、そうした雑誌を主要な手がかりにして、明治期の子ども読書文化のありようを、それぞれ究明したものである。

「児童雑誌」とは、子どもの精神的成長を目的に大人が編集し、読み物・挿絵・クイズ・投書などからなるものと定義されるが、こうした雑誌を資料にする研究の蓄積は分厚い。しかしそのほとんどが、雑誌中から芸術性や創造性の豊かな読み物を選び出し、それらを分析する児童文学研究であり、そこでは原作が重視され、翻訳物が俎上に載ることはない。近年になって増えている児童雑誌研究も、「少年」や「少女」というカテゴリーの誕生を論じる社会史研究である。本論文は、それらと一線を画し、雑誌の制作・編集・流通・販売・受容の実態と意義の解明を課題とするメディア論研究であることを最大の特徴とする。そして論者は、児童文学研究と社会史研究のこれまでの成果も取り入れながら、明治期の児童雑誌の諸相を総合的に描こうとする。

論者が第一に着目する雑誌は、従来の研究が児童雑誌草創期のものとしてもっぱら重視してきた『少年園』（1888年創刊）ではなく、それに先だつ1876年に刊行が始まった『よろこばしきおとづれ』（1882年『喜の音』に改題）である。先行研究がこの雑誌を等閑視してきたのは、『少年園』と異なり、読み物が翻訳作品だったからであると、論者は指摘する。近代日本における児童雑誌の成立過程を跡づけるためには、最初期に刊行されていたこの雑誌を見過ごしてはいけないという論者の主張には、頷けるところが多い。

『よろこばしきおとづれ』は、日本におけるキリスト教伝道のための雑誌であり、資金はアメリカの外国日曜学校協会が提供し、無料で配布されていた。論者は、アメリカで出版されていた日曜学校用の読み物とキリスト教新聞・雑誌、および、日本に先だって中国で伝道用に制作されていた同種の雑誌『小孩月報』と、他方『よろこばしきおとづれ』とを、文章だけでなく挿絵も対照させ、後者の誌面が、前者雑誌群からの翻訳、およびキリスト教信仰を強調する加筆でもって構成されていたことを解明した。こうした手間のかかる誌面对照により、近代日本における児童雑誌の成立過程において、キリスト教ネットワークが大きく寄与していたことが明らかになった。太平洋だけでなく、東シナ海を渡るネットワークにも支えられて日本で児童雑誌が誕生した経緯が解明できたことは、グローバルな視点をもつ論者ゆえの成果である。

つぎに論者は、キリスト教ネットワークが日本における児童雑誌のその後の展開に与りつつも、児童雑誌にあらたな変容が生じたことを、『ちゑのあけぼの』（1886年創刊）を分析することで論証する。この雑誌の編集者は全員が日本人キリスト教徒であり、読み物の多くも、『喜の音』と、日本最初のキリスト教定期刊行物『七一雑報』からの、一部改変による転載で、しかも翻訳物でほぼ占められていた。しかし『ちゑのあけぼの』は、『よろこばしきおとづれ』（『喜の音』）とちがい有料販売で、しかもキリスト教団体からの資金援助を受けなかったことを、論者は外国日曜学

校協会と在日教会の会計簿から突き止めた。さらに、『喜の音』と『七一雑報』からの転載にあたりキリスト教色を薄める改変がおこなわれたことも解明した。つまり、キリスト教ネットワークを利用して誕生した日本における児童雑誌は、それと絶縁することはないものの、伝道目的でない一般雑誌へと変容したことが明らかにされたのである。先行研究が重視する児童雑誌『少年園』に先だつ2年前のことであり、論者によるこの指摘は、これまでの研究史に対して書き換えをせまるものである。

ついで論者は、明治期の子ども読書文化について論を進める。使用される資料は、二宮金次郎（尊徳）の「負薪読書」に関わる文献と、『少年園』紙面に残された読者の書き入れ、そして、高等小学校生徒が担任教員と交わした日誌の三種類である。

近代日本において偉人とされた二宮は、薪を背負いながら本を読む姿で現在も多くの日本人によって記憶されている。この姿に着目した論者は、二宮の最初の伝記『報徳記』（1856年脱稿）をはじめ、江戸期から明治期にいたる新聞・雑誌のなかで表された「負薪読書」関連の文章と図版を網羅的に検討し、江戸期はもっぱら親孝行を勧めるものであった「負薪読書」が、明治に入り、もっぱら読書を勧めるものへと読み換えられたことを解明した。そして、こうした読み換えの背後に、読書を通じた勉学が個人と家に富という成功をもたらし、さらにそれが国富へとつながるといふ立身出世主義が明治期に広がっていたことを、児童雑誌の投稿欄に寄せられた子どもたちの声を拾うことで指摘する。資料に裏付けられた説得的な議論だと評価できる。

ただし、投稿文が子どもたちの肉声であることは、かならずしも保証されていない。投稿文は編集側の理想像に合致するものが選ばれるからである。さらに、編集側が修整をくわえる場合もある。論者は、こうした実態を熟知しており、雑誌紙面に残された読者の書き入れという、より肉声に近い資料も検討する。現時点で、書き入れがある『少年園』を所蔵している機関は4件あり、論者はそのすべてで調査を行った。そして、読者による書き入れは、巻頭論説をはじめとした立身出世譚に多くみられることを検証した。これも、丹念な調査による重要な成果だと評価できる。

論者は最後に、10歳の男児が1896年から約1年半にわたって担任と交わした日誌を検討する。そこには、男児が児童雑誌を読んでいたことと、担任による読書指導メモが記されており、雑誌を読むことが日常的な営みであると同時に、家庭での読書に学校の管理が及んでいたという、当時の読書文化の一端を論者は具体的に明らかにした。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2019年2月15日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。